第8回国際日本文学研究集会研究発表（1984．11）

日本におけるツルゲネフ受容に関する一考察

On the Reception of Turgenev in Japan

Rexo Kim*

1．According to the *Nihon Kindaibungaku Daijiten*, vol. 4, the earliest translation of Turgenev into Japanese was Futabatei's *Fathers and Sons,* but that translation was abandonned and never saw the light of day. As a result, it is generally accepted that the earliest Turgenev translation into Japanese was Futabatei's translation *Aibiki,* published in the *Kokumin no Tomo* in 1888. However, volume six of Yanagida Izumi's *Meijibungaku Kenkyu* lists the appearance in 1883 of "a translation of a prose poem by Turgenev, of uncertain provenance." The reference is evidently to the publication on December 28, 1883, in the *Chōya Shimbun,* of a prose poem of Turgenev entitled, in Japanese, "Turgenev's Dialogue" (*Tsurugenefu no Taiwa*). In fact this is a translation of a work by Turgenev entitled "The Threshold" (Порог). It is a complete and relatively faithful translation, and it is characteristic that, in the context of the Japanese movement for free civil rights, when Turgenev's name was associated with the Russian Nihilist Party, a work such as this, among Turgenev's most radical texts, should have been translated.

---

* ソ連科学アカデミー世界文学研究所教授

Among translations of "The Threshold" there appeared a French rendition published on Ocotber 21, 1883, in the paper "La Justice." This, however, was a translation by the Russian woman writer and socialist B.N.Nikichina, and not a translation by a native French speaker. In this sense, the Japanese translation appearing two months later may be regarded as earliest translation of "The Threshold" outside of Russia. The Japanese translation appears to be a retranslation of the French translation.

Volume 10 of the Soviet Academy of Sciences edition of Turgenev's complete works (Moscow 1982) includes detailed notes on translations of "The Threshold," but fails to mention this Japanese translation, and should be supplemented accordingly.

2. Opinions of Soviet scholars on the role Turgenev has played in modern Japanese literature are divided. There are those who attribute the enthusiastic reception of Turgenev's work by Meiji readers to the proximity of his esthetic to the notion of *mononoaware* in the Japanese classical literary tradition. However, one typical feature of the reception of foreign literatures is the motive of absorbing what is alien to the native tradition and thereby enriching the latter. This feature seems to apply as well to the Japanese reception of Turgenev.

ツルゲネフと近代日本文学のつながりについては、周知のように、多くの日本、ソ連の学者たちが研究論文を発表しています。そこではツルゲネフが近代日本文学の思想・自然観・文体などにいかにいちじるしい影響を与えた

かが指摘されています。

だが、日本におけるツルゲネフ受容の歴史はいつから始ったか、ツルゲネフのどういう作品が、日本で始めて紹介されたかについては、まだ意見の一致がないように思われます。　すぐれた『日本近代文学大事典』第4巻（1977年版）の「日本近代文学とツルゲネフ」の項には次のように書かれています。

「当時ロシアの虚無党の活動が注目されていたので、ツルゲネフの作品中まず最初に翻訳されたのが、「ニヒリスト」の出典でもある「父と子」であったのも時代のしからしめるところであった。訳者は冷々亭杏雨、すなわちのちの二葉亭四迷、この翻訳はつごうで中絶し、ついに陽の目を見ることがなかったが、幸いにその広告文が残されている」と。

結局、1888年7月と8月の「國民之友」に発表された、二葉亭四迷訳「あひびき」（「獵人日記」中の一篇）が日本で活字になったツルゲネフの最初の訳だという見解が定説のように思われます。

しかし、柳田泉氏は著書『明治初期翻訳文学の研究』（1961年版）に明治初期翻訳文学年表をかかげていますが、そこに「1883年・露國・ツルゲネフ散文詩（1篇）・未詳・朝野新聞」と記しています。「あひびき」の訳が紹介される5年も前の事です。

さて、この原作未詳のツルゲネフ散文詩1篇とはいったい何でしょうか。その原題は何でしょう？

「朝野新聞」1883年12月28日号に「トルゲニェーフの対話」とタイトルをつけた文章がのっています。その前書きを引用させていただきます。

「左に記載する1編の対話は魯國虚無党中の学者と呼ばれるトルゲニェーフなる者が其党を以て高楼に比し、之に入らんとする者を以て処女に擬し、政府を以て音声に喩へ、処女と音声とが互いに問答するの様に作りたる者にして同党に加盟する志士の決心は飽まで堅固にして如何なる艱難に遭遇するも復た其志を奪ふべからざるの有様を示せしものなれば記して以て読者に示す

そのような内容の作品をツルゲネフの散文詩の中でさがしてみると、彼の

有名な散文詩「敷居」(“Порог”)につきあたりました。注目すべきは、朝野新聞のこの前書きが「敷居」の内容をほぼ正確に表現していることです。そしてその日本語訳はかなり原文に忠実で、しかも完訳です。残念ながら訳者は匿名になっていますが。いずれにせよ、この作品が「トルゲニェーフの対話」という題で発表されたので、その原作がいままで解明できなかったのではないかと思われます。中村喜和教授はその著『瀬沼夏葉、その生涯と業績』(1972年)に、

> 散文詩に限ってみても、その一篇が早くも明治23年(つまり1890年)森鷗外によって「馬鹿な男」(原名 Dypak・神西・池田訳「あほう」)の題名で紹介された。これは無論、ドイツ語のテクストからの重訳であった。同じ年に宮崎湖処子訳「二羽の鳩」(Голуби「はと」)もあらわれている。(同書、31頁)

と、書いています。

散文詩「敷居」は、ツルゲネフの文学遺産の中でも最も急進的な思想を表わしている作品の一つと言えませう。ツルゲネフと同時代人で又友人でもあり、著名な文学者でもあったA.Φコーニはこの作品を、革命に命をささげようと心に誓う一女性と運命の対話と解釈しています。

だが「敷居」の日本語訳の前書きは、この作品をもっと直接的、急進的に解釈して一女性革命家と、ツアー専制政府との対決、彼女の堅固不屈の意志の賛美と解説をつけています。　明治初期、自由民権運動が全国に広がり、ロシアにおける「人民の意志」党員達の社会活動が注目され、例えば、首都ペテルブルグ市長トレーポクを狙撃したベーラ・ザスーリチの裁判に関する記事が「曙新聞」に報道されたりしていた時、日本の読者達がツルゲネフのこの急進的な作品に注意をはらったのは、偶然ではなかったのです。「敷居」を通して彼等は「ロシア虚無主義」の真実を知ろうと望みをかけたのでせう。

1883年12月27日と28日の「郵便報知」新聞は「闔棺記事」に露都ペテルブルグからロンドン・タイムズの通信者が報道した、ツルゲネフの葬式に関する記事を二日にわたってくわしく紹介しています。これについて柳田泉氏は

前に引用した『明治初期翻訳文学の研究』の中で次ように書いています。

然しこの記事の長きはいささか異常である。……それが普通のやり方に出ず、かく葬儀の顚末を詳報せるは、蓋し当時の日本の読者に対して諷するところがあるのである。葬儀は民意を代表し、政府即ち官はそれを抑圧せんとする。民意はそれをはね返して、わが意のままにやり遂げた。ロシアの如き國威官権の強き國でも一度人民が決心してやれば、この通りやれるのである。日本人もこれに鑑みて今少し奮発せよという諷意がそこに汲みとれると思う（同書、140、141頁）

ツルゲネフの葬儀に関する記事が、「郵便報知」に紹介されたその日、すなわち1883年12月28日に、自由民権思想に共鳴する「朝野新聞」に、散文詩「敷居」が翻訳、発表されたことは注目に値いします。

「敷居」の日本語訳と原文を照らし合わせて見ると、日本訳が如何にツルゲネフの散文詩の主想（アイデア）に共鳴しているかがわかります。

原文では「敷居」はこのように結ばれています。

次は私の直訳です。

—では中に入れ！

女は敷居を跨ぎ越える。同時に重い幕が閉じた

—愚か者！後ろで誰か歯軋りしている

—汝は聖なり！どこからか答えが聞こえてくる。

朝野新聞の日本語訳…

処女門閾を横断して暗黒の内に入る。音声再び喃々として曰く。愚なり、愚なりと、忽ちにして朗々たる清音、天上より下り、処女を賞賛して曰く。汝は聖なり、賢なり、能く國の為に尽くせる者なりと。

日本語訳者は多分その女主人公に自分の同情・共感を心の限り示す為に、原文にはない言葉を自分から書き加えています。自由民権運動が嵐のように全国にひろまった当時の、ツルゲネフ散文詩の受け取り方の一つとして私達の興味をひきます。

「敷居」について当時のロシア評論では色々議論がありましたが、最も論

争を引き起したのは、その一句「一汝は飽までも罪を犯さんと慾する心情なる乎。処女首を垂れて答えず。良久(やや)しくして曰く、然り、妾(わらわ)敢て之を行はん」(「朝野新聞」の翻訳より引用)

革命の為に止むを得ず罪を犯さねばならぬ場合、君は敢えて罪を犯すことが出来るかということです。処女は「敢えて之を行はん」と答えます。

事実、「敷居」の下書き原稿にはこの一句が入っていません。しかし出来あがったツルゲネフ自筆原稿には作家自身が鉛筆で、この一句を書き加えています。またこの一句は作者が植字に渡した原稿にも入っています。(ソ連・科学アカデミー版・ツルゲネフ全集・第10巻・「敷居」注参照)。

しかしツルゲネフ研究家として著名でもあった今世紀初頭の評論家H.M.(エヌ・エム)グチカルは上に引用した「敷居」の一句はツルゲネフの高尚な道徳観とは相反するものと見、最初の原稿にはこの一句がないから、これを取り除くべきだと主張しました。このグチカルの論文は1906年6月号の「歴史通報」に発表されましたが、この「歴史通報」は「敷居」の例の一句を削ってこの散文詩を発表しています。

しかし当時の日本の翻訳者及び朝野新聞社編集部はこの事を問題にしていません。この一句は省略されずそのまま訳されています。この事も明治初期の自由民権運動のいきさつを示す一つの材料ではないかと思われます。

さて次に重要な問題はこのツルゲネフの散文詩がどのような経路を経て日本に紹介されたかということです。

「敷居」の原稿が完成したのは1878年5月でした。ツルゲネフはその原稿を「ヨーロッパ通報」紙の編集人であり、社会評論家であるM.M.スタシュレビチに送りましたが、M.スタシュレビチは検閲を恐れ、植字に渡すべく準備したその原稿にまず副題目として「夢」を書き加え(つまりこれは夢であって現実にあった事ではないという事を強調)そして例の一句「汝は飽までも罪を犯さんと慾する心情なる乎」「然り、妾(わらわ)敢えて之を行はんとす」—この行の横に鉛筆でこの一句は取り除くべしと記しています。それに対してツルゲネフはもしも「敷居」が検閲の為、省約しなければならないなら、むしろ公

表しないのが、かえっていいと自分の意志を表しました。「敷居」は結局「ヨーロッパ通報」では発表されませんでした。ツルゲネフの「敷居」が活字になって最初に合法的に発表されたのは1905年のことでした。(「ロシアの財宝」・1905年11～12巻) それまではスタシュレビチの許にあった「敷居」の原稿が何人かの手で復写され地下で読まれました。ではどうして早くも1883年に「敷居」は日本語で翻訳される事が出来たのでせうか？

1883年9月27日、首都ペテルブルグで行われたツルゲネフの葬儀の時「人民意志」党員Л(エル)・Ф(エフ).ヤクボビチ＝メリシンは自分が作った宣伝ビラの檄文に「敷居」を加えて印刷しています。この檄文は憲兵によるきびしい警戒の為ほんのわずかな部数がツルゲネフ葬式参加者達の手に渡りました。ツルゲネフのこの散文詩はむしろ外国で亡命生活をしていたロシアの急進的革命家たちの間で先ず広く読まれました。

1883年10月21日号のフランスの新聞“La Justice”に当地に亡命していたロシア女流作家・社会主義者В(ヴエ)・Н(エヌ).ニキチナ女史による「敷居」のフランス語訳が載りました。これは多分ツルゲネフ葬儀の時「人民意志」党員たちが作った檄文にのった「敷居」からの翻訳だと推定されます。

このロシア人・ニキチナ女史のフランス語訳が「敷居」の外国語による始めての翻訳だと言われています。このフランス語訳が出てからたった二カ月過ぎて「朝野新聞」にまたかなり原文に忠実な日本語訳が発表されています。

日本でも有名な「地底のロシア」の作者、ステプニヤク・クラブチンスキーの「敷居」の英語訳がロンドンの「タイム」紙にのったのは1885年の事です。「敷居」がドイツ語で訳されて発表されたのは1890年。その前年1889年に「敷居」のブルガリア語初訳が出ました。

すると、1883年の「朝野新聞」にのった「敷居」の日本語訳が、外国でしかも外国人の手によってなされた最初の翻訳である事を認めなければなりません。ソ連アカデミー版、ツルゲネフ全集10巻には「敷居」に関するくわしい註が入っていて、「敷居」の外国語訳についても言及しています。だが「朝野新聞」の日本語訳については一言もふれていません。その事実について情報

が不足していたからです。しかしツルゲネフ全集復版には註に明記されるべきです。

だが興味ある問題は、この日本語訳のテキストは何かということです。ロシアから「敷居」の地下印刷が入って来たとは思われません。ツルゲネフの葬儀に関する記事も当時はロンドン「タイム」からの転載でありましたから。するとこれはニキチナ女史のフランス訳からの重訳であったと推定されます。当時はロシア虚無党の消息は大抵フランスから入っていました。例えば1882年にポリ・ベルニイエの「虚無党狩り」がフランス語から日本語に訳されています。

「敷居」の日本語訳の経緯をたどる事は自由民権運動と近代日本文学の形成期におけるツルゲネフの受容を考える上で興味あることだと思います。

周知のように、明治初期に紹介された、ツルゲネフがロシア虚無党の指導者の一人であるという一種の伝説は1888年に出版された二葉亭四迷訳の「あひびき」と「めぐりあひ」によって消え去りました。正宗白鳥がツルゲネフのこの二つの短篇は外国作家の翻訳というよりは、むしろ近代日本文学の古典的作品として日本文学史にのこそうと言ったことは有名です。

では正宗白鳥のこの言葉をどう解釈したらいいのでせうか？。近代日本文学の形成期にツルゲネフの何が日本人の関心をひいたのか？この問題についてソ連の日本文学研究者達の間で最近若干の論議がありました。

日本文学研究者のЛ.グロムコフスカヤ女史は1982年に出版された「ロシア古典文学と東洋」という論文集に「日本におけるロシア古典文学の最初の訳」という論文で、この問題を追究しながら次のような意見を述べています。即ち、ロシア文学が、特にツルゲネフの作品が日本人に強い印象を与えたのは、外ならず、彼等がロシア文学に何か「同類の親近感」を感じたからである。それは、ロシア19世紀作家達の美意識が日本の伝統的な美の観念、つまり「もののあわれ」とあてはまるからである、と『この同類の親近感こそが、ロシア文学が内包していた新しいものよりもロシア文学が日本で大もてされた最も重要な原因ではなかろうか』と彼女は書いています。（同書、227頁）

ここには本質的な問題が提起されています。日本におけるロシア文学の受容のあり方と、また近代日本文学の美意識の問題と関連しているからです。

日本の読者がツルゲネフの豊富な抒情性・詩的感覚に魅惑されたのは事実でせう。二葉亭はこの作品の中に「晩春」の詩情を感じとり「艶麗の中にどっか寂しい所のあるのがツルゲネフの詩想である」と「余が翻訳の標準」に書いています。「あひびき」をよんだ田山花袋が

「あっ秋だ！誰かが向うを通ると見えて、空車の音が虚空にひびき渡った…」その一節が、故郷の田舎の樽林（ナラ）の多い野に、或は東京近郊の榛の木の並んだ丘の上に、幾度思ひ出されたことか知れなかった

と書いたのは周知のとおりです。だがほぼ同じことをフランスの作家・アルフオンス・ドデが、セナルの森の中でツルゲネフの短篇をよみ、いかに感動したかを書いています。

勿論、ツルゲネフの自然と哀愁の美化、陰影への細い感覚—これは自然美に特別な関心をもっている日本人達にとって非常に魅惑的であったのは事実でせう。だがそれは日本人の伝統的な美意識よりも、むしろ「もののあはれ」的な発想とは異なる新しい自然の見方を、そこに発見したからではないでせうか。だからこそ、田山花袋は

「あひびき」のあの細かい天然の描写、私等は解らずなりにもかうした新しい文章があるかと思うと胸を躍した。…明治文壇に於ける天然の新しい見方は、実にこの「あひびき」の翻訳に負うところが多いと思ふ

と書いたのです。そもそもツルゲネフの自然観と日本の伝統的な自然観の間には根本的な差違があるのです。

H（エヌ）.コンラド博士はツルゲネフの自然の描き方が日本画的な「線」の画法に対し「光と影」の画法を用いており、それが近代日本文学の創始者の注意を引いたと指摘しています。佐藤清郎教授もその著『ツルゲネフの生涯』（1977年）で、日本的一元論的自然観とツルゲネフの二元的自然観とは異質であり、同質でなく異質だからこそ惹かれたのだと書いています。これは文学の過渡期・新しい文学の形成期における外國文学受容に共通する一形式だと思いま

す。

明治日本におけるロシア19世紀文学（ツルゲネフをふくめて）の受容について考える場合、又重視しなければならないのは、19世紀ロシア文学がもっているルネッサンス的な要素であると思います。

福田恒存氏は論文集『日本近代文学と外国文学』(1969年)に納めた論文「近代演劇の発展とシエークスピア」の中で明治の日本文学者たちは、

> 西洋文明というものが非常に退廃してきて、だめになってきたとき、その時の文学をとらえて、これが西洋の本質であり、西洋文学の本質であるという風に間違えた。つまり、西洋文学が行き詰まったときの形をもって出発したのでは、日本文学というものはなかなかうまくいくわけはないのであります。それはまず大きな間違いでありますが、私はそういう意味で、やはり西洋文学の源流に（つまり、ルネッサンス前後に）さかのぼらなきゃならないと思います。(同書、88、89頁)

事実、19世紀の後半にシエークスピアの文学に接触したばかりの日本の読者達は、その深い理解をする暇もなく、西洋の世紀末的な文学に出合いました。この退廃した西洋文学が自由民権運動の嵐を経験した明治の知識人達の心に打ってくるものがなかったのは当然でせう。だが19世紀後半にヨーロッパの世紀末的な文学とは全く異質な、人間の個性の尊重とそれを実現する為の献身的な闘いを標榜したロシア文学は当時ヨーロッパで最も「若い文学」でした。ロシア19世紀文学が内包していた啓蒙思想・ルネッサンス的思考—このヨーロッパではすでに忘れられた思想が明治の文化人の心をひき、又当時東洋でもっとも「若い文学」であった日本文学の基本的要求にぴったり合ったのでせう。だから明治の日本人達はシエークスピアの劇で接したルネッサンス思想を、ロシア文学を通して続けて受容することが出来たという事が言えるのではないでせうか。その受容の内容が充分であったか、なかったかは別として。すると、青野季吉がその著『文学50年』にスタンダールの『赤と黒』の主人公・ジュリエン・ソレーリではなく、ツルゲネフの主人公ルージンと出合ったのは彼にとって運命であったと書いたその意味がわかってくる

ように思われます。

ロシア文学とヨーロッパ・ルネッサンスの、明治期における日本文学の受容のあり方についての一つの問題を提起して、私はこのレポートを終ります。

討議要旨

福田氏から、二葉亭の「敷居」の翻訳がB.H.（ヴェ エヌ）ニキチナのフランス訳からの重訳であることは訳文から証拠づけられるか、と質問があり、　発表者から、ここへ来るまでにフランス訳が入取できなかったので調べられなかったが帰ってから研究する予定である。という回答があった。

また、伊東氏から、ツルゲネフの美意識と日本の伝統的な美意識は全く違うということであったが、違う点を指摘願いたいと発言があり、

発表者から、ツルゲネフの作品や論文、また彼だけでなく西洋人の自然の見方は、日本の伝統的な見方と全く異る。西洋では、一段高い人間の立場から自然を見ます。もし私の理解が誤りでなければ、日本の伝統的な自然の見方は、人間と自然が融合するということで、全く反するものであると思います。と答えがあった。

宮下氏からも、漱石も自然について書いているが、日本の近代文学における自然描写は日本の伝統的な自然描写とは異り、翻訳などにより西洋の自然観を取り入れた新らしい見方をつくり上げて行った点を無視できないと思うと発言があり、

発表者から国木田独歩の自然描写は日本の伝統的自然観と異るものであり、現代文学になれば、安部公房の砂の女の自然のように全く変ってしまっている。自分は砂の女の主人公は外の美しい自然にもどるのではないかと思って読んだが、遂にそれは出てこない。ツルゲネフは、自然は実験室ラボラトリヤだと書いているが、砂の女の主人公も実験を重ねて水を得たり、脱出を試みたりしている。それは藤村の自然とは全く違うものである。と見解が示された。